

特 集

地 域 精 神 医 学

—その理論と実践—

第 63 回日本精神神経学会総会シンポジウム*

□ はじめに □

司 会 加 藤 正 明

「地域精神医学」のシンポジウムは、前日に行なわれた「精神医療体系のなかでの精神病院の位置づけ」の継続として行なわれた。このことは、医療活動の中心となる精神病院に加うるに、公衆衛生活動の一環としての地域精神衛生が、精神科医療体系の発展に不可欠なことを明らかにしようとしたからである。

したがってこのシンポジウムの最初に、この趣旨を副司会者の佐藤三氏が述べ、ついで「精神病院の位置づけ」のシンポジウムの副司会者の岡田靖雄氏から、前日の分科会における問題点をあげて説明することをお願いした。

依頼口演者および一般口演者をあわせて、思いがけず多数にのぼったが「地域精神医学」の問題を扱うにあたって、精神科医のみならず、他の領域の意見を聞くことが、きわめて肝要であると考えた。講師の依頼について若干の方の意見を聞いたうえで、まず「コミュニティ」とは何か、またそれはいかに発展してきたかという根本問題が重要であると考え、とくに歴史学者の羽仁五郎先生に特別講演をお願いすることにした。また、公衆衛生の立場からは公衆衛生院衛生行政学部長の橋本正己氏、一般医療の立場から川上武氏に口演をお願いした。

時間的制約から、これらの精神医学以外の方々から十分な意見聞くことができなかったのは残念である。ことに羽仁先生の講演はきわめて充実した内容であり、このあと、当然われわれ精神医学の領域でのコミュニティ概念が問題にされねばならなかった。

このシンポジウムを本誌に掲載するにあたって、一般演題も含めて、全文をのせることはとうてい不可能に近く、総花的に抄録程度のものをのせるよりも、問題点を

いくつかにしぼって、数人のものがそれをまとめ、とくに特別講演に大半の紙面を割くほうが有意義ではないかと思われた。したがって、問題を疫学的研究、特殊階層の問題、家族会の意義、精神病院と地域社会にせよ、おのおのこれをまとめたかたちで書くことにした。せっかくシンポジウムで口演された方の原稿がのらず、落胆されたかたもあるだろうが、それはまたべつにまとめて原著として発表していただければと思う。

地域精神医療、地域精神医学は地域中心の精神医療ないし精神医学であり、大学精神医学、病院精神医学と相互に手をたずさえて、発展すべきものである。この学会のあと、5月にワシントンで開かれた「地域精神衛生計画の評価に関する国際会議」に出席し、米、英、仏を初め、世界の十数カ国の地域精神衛生計画についての発表があり、討議が4日間つづけられた。来年の学会総会でもこの問題がとりあげられるが、日本においてその特殊状況のうえにいかにか地域精神医療が展開されうかの問題に腰をおろしてとりくむ必要があると思われる。このシンポジウムが、この意味でなんらかの問題提起になれば幸いと思う。



写真

左：司 会 加藤正明（国立精神衛生研究所）
右：副司会 佐藤三三（銚子市立病院神経科）

* 第 21 分科集会、1966 年 4 月 8 日
於：東京国立教育会館